

**文化審議会文化政策部会****くらしの文化ワーキンググループ（第1回及び第2回）における主な御意見****【論点横断的な御意見】**

- 国としての政策を考える場合、国が生活文化に直接干渉するのは良くない。国として検討すべき政策は、税制、法、競争的資金、顕彰等のあり方といったインセンティブを設計すること、民間で既に行われていることの障害を取り除く、あるいは支援すること、自治体の創造性を引き出していくことであろう。
- 国が生活文化に介入することには違和感が伴うところ、いかに実効性ある策を講ずるか。地方自治体や NPO 主催の文化公演会に呼ばれることがあるが、中には資金的・財政的要因で開催中止に追い込まれるなど残念に思うことがある。たいがいネックは公演料やギャラなのだが、周りには意義あることなら無償で引き受けても良いという人は結構いる。そこには派遣業者やプロダクションが介在する点に問題がある。例えば文化庁が文化人リストを作成して、登録者には年に数回程度無償で公演を受けてもらうなど、費用のかからない仕組みが考えられないか。また、地域の文化人による対談というのも良いのではないか。
- これまで建物等ハード面では各省庁から補助金や助成金のメニューがあったが、地域資源を発掘したり、立ち上げを支援したりするプログラムはまだまだ足りない。地方自治体も知恵を出して前向きに進めようとしてくれるが、まだ不十分だ。
- 事業に対する国からの支援について、事業が終わってからでないとお金が出ないのは問題。300万円の助成が決定されて、600万円の事業の半分補助といっても助成額は立替えて進める必要があり、特にNPOだと金融機関も融資してくれないため、いかに資金を調達するか現場は火の車となる。
- 確実に発信できる文化がある一方で、日本の「くらしの文化」の足元が揺らいでいる。文科省で、少なくとも学校の給食においてお箸や瀬戸物茶碗を扱うといった本来家庭ですべきことを国として行う必要もあるのではないか。
- 文化には、発掘と交流が大事。連携や交流から文化の再発見や人材の発掘が起こる。文化は美しいものであるだけでなく、人生を支えるものでなければ残っていけない。日本の伝統文化と体験文化・生活文化を両輪として伝達、交流、発掘で繋いでいくことが必要で、若者の「生きる力」にも繋げたい。
- 外国人から見て、日本では長い歴史の中で文化の継承がうまくいっていると同時に、伝統とハイテクをうまく融合させていると思う。

**【論点1（生活文化の振興と文化発信への活用）関連の御意見】**

- 生活文化の国内における継承・振興や海外発信の方策を講じるためには、まずもって、そうすべき生活文化とは何であるかを明確化し、基礎資料を国としてまとめるべき。
- 今後の政策を考える上では、そこに補助金を出していくということではなく、まず既存の活動をフォーマットも統一した上でデータ化・体系化する必要がある。

- 日本で文化といわれるものと日本人の暮らし、生活文化が乖離している。お花や着物は分かる人がやればいい、きらびやかで素敵で憧れるけれど生活には必要ないと言われてしまう。だからといって無くなって良いのではなく、一度触れてみることで、素晴らしさが自分のものとなる。自分の中にとけ込ませることができて初めて、自分の中の可能性が文化によって引き出される場合がある。
- 文化を生活の中にどう落とし込むかということに加えて、当事者が気づいていないところにも立派な文化がある、その「発見」を手助けすることも必要。外来者にとってはかけがえのないものであっても、当事者にとっては取るに足らないといった乖離がある場合、誰かが他所から来て伝え、誰かが他所にもっていき伝えないことには分からない。
- 茶花香は生活文化と言われるが、現代の学生生活には入っておらず、学生や外国の方にも基礎知識から教える必要がある。茶道や華道は多くの大学に部として存在するが、香道部がある大学は3つほど。茶道、華道は外国でも行われているが、ほとんど民間の活動である。
- 和室が減少しており、今の学生や若い教員も和室の六畳や四畳半を描くことができない。そういったことを理解させるためには現場に連れ出し実体験させることが大切。
- 学校教育の中に何でも取り込む発想からの脱却が必要。やはり学校から連れ出し、本物を見せることが重要である。北欧の国では、子どもたちが放課後に通える音楽学校や美術、演劇、ダンス学校があり、国・市・保護者が3分の1ずつ負担し合っている。
- 生活文化の振興については、子ども時分からいかに触れさせるかが大事であり、きっかけづくりとして学校教育に入れていくことも必要。
- かつて茶花香はもう少し生活に根付いていた。その点、学校教育については論あるが、やはりきっかけづくりが必要であるとともに、継承の問題を考える必要がある。
- 政策には馴染まないかもしれないが、各分野でいかにスターを輩出するか。各分野で一人スターが生まれれば、広がりができる（例えば、将棋の羽生氏）。いろいろな場を提供することでそのスターを支えることは可能である。
- メディアが担う「情報文化」の先にある「体験文化」が必要である。例えば、農業は生き物や自然と対峙することであって、それは心地良いこと・都合の良いことばかりではない。都合の悪いことも受け入れ、乗り越えて自分の生きる糧にしていく力が社会をつくる国の力になっていく。そのような模擬体験も必要であろう。
- 文化の継承のためには、どの文化・時代でも新しいことに目を向け興味をもつ若者に伝統的な生活文化を理解させることが重要。現代文化と伝統文化を理解する上で、ゲームやインターネットを使うなど、若者に受け入れやすい方法が良いのではないか。任天堂のWii Fitで座禅を体験できるものがあるが、その手法を生け花や茶道にも応用してはどうか。もちろん本物を体験することも大事だが、他にも方法は考えられる。
- 伝統文化に若い人が親しみやすい方法で触れるきっかけをつくり、関心をもった人には次の段階として本物に触れる場が必要。
- オーストラリアの国立博物館では、過去から現代の「暮らし」を並べて展示し、今の「暮らしの文化」をよく理解できれば、伝統や歴史について考えることもできるように

なるという発想を採っている。先住民の「くらしの文化」も展示しているが、時代の変化に適用させることによって広く長く残る伝統もある。また、オーストラリアでは博物館に来られない人のためにウェブサイトでの情報発信にも力を入れている。

**【論点 2（衣食住に関する文化の観光振興、地域振興、文化発信への活用）関連の御意見】**

- 日本の問題は、京都も然り、どんなに美しい街並みがあっても日本らしい受入れ施設が整っていないところにある。日本には、暮らしに根付いた文化、あるいは歴史や伝統文化に裏打ちされた潜在的な観光資源が多くある。地域の食も大切な観光資源。観光ビジネスによって古民家を再生し、文化を残すことによって地域が活性化すれば、雇用の創出、文化の継承にも繋がる。
- 地域の暮らしに根付いた文化については、高齢過疎化に伴い継承者が減少している。例えば草鞋作りでも70代と60代半ばの間に断絶が生じている。例えば徳島の祖谷（三好市）など、なんとか「くらしの文化」を遺そうとしているところがあるが、テーマパークとしてではなく人が生活するところとしていかに残していくか。単に資金援助ではなく、伝統の継承や観光振興、若者が定住する仕組みづくりといった行政支援の在り方を考えていただきたい。
- 地域資源、地域文化をいかに活用していくか、発掘し売り出していくか、自治体にとっては重要なテーマ。ブランド化については、知財戦略の一環として地域団体商標制度（地域名と一般の普通名称を公的な団体が申請し商標として認めるもの）の活用が有効ではないか。
- 浜松市では、これまで放置されてきた歴史的価値のある建造物を改修し、各種記念館として利用している（例えば、古い役場は本田宗一郎伝承記念館、昔の銀行は木下圭介記念館と市民ギャラリーとして）。また、衰退した伝統繊維産業を再生し、新しい産業にすべくデザインを現代風にアレンジしたり、衣服以外への活用の幅を広げたりする取組を行っている。商品をいかにビジネス化していくのか、継続性あるビジネスとして成立するような支援が必要。また、県境を越えて田舎歌舞伎の保存・振興に取り組んでいるが、広域連携による産業振興や文化振興を国として支援することも必要。
- 伝統文化の継承と地域活性化の良い例として、越後妻有（新潟）の「大地の芸術祭」があげられる。オーストラリアは、築100年以上の伝統的な空き家を再生して「オーストラリア・ハウス」と名付けた。オーストラリアのアーティストが約1ヶ月間滞在し、伝統の素晴らしさを伝えながら現代的アートを紹介し、多くの観光客を呼ぶとともに、地元の人との交流も深めた。
- 今年7月の「瀬戸内国際芸術祭」では、地元の漁師が漁で使う縄を利用した作品をオーストラリアのアーティストが制作している。日本で失われつつある文化がオーストラリアのアーティストによって作品化され、多くの観光客に伝えられる機会となる。
- 新成長戦略の中に観光立国の推進として3,000万人構想があるが、京都は海外からの観光客が年間約150万人であるのに対しパリは3,000万人。日本に外国人観光客が増えれば日本の新しい経済発展に繋がるのだが、そういう意味で日本は「観光立

国」とは言いつつ、まだまだ観光後進国なのではないか。

- 日本全国‘体験プログラムばやり’の状況だが、受入れ態勢が研修や修学旅行のためになっており、大人に喜んでもらえる仕組みになっていない。外国人にも本物を体験してもらえるような仕組みが必要。
- 日本の「くらしの文化」に関する情報を外国語でまとめ、ウェブサイトで提供することが必要。日本の文化紹介のため外国メディアを招聘することも効果的。「大地の芸術祭」はジャーナリストによって紹介され、オーストラリアでもよく知られている。
- 京都の町家の話など、いかに発信するかという点については、例えば政府観光局のHPにリンクをはるなど外国向けのポータルサイトをつくり、英語でまとめた情報を発信することが必要。
- 文化財ではないが、街の景観を構成する伝統的な建築物の保存・再生を促進する税制や融資についても検討すべき。
- 伝統工芸品については、経済産業省の伝統的産業振興と文化庁の文化財政策のしきりを見直し、伝統工芸品をクリエイティブ産業として振興すべき。
- 食文化について言えば、各地方・地域の伝統的な日常の「ハレの料理」「ケの料理」を各都道府県の教育委員会等でまとめてはどうか。イメージとしては、既に文化庁が作成した「お雑煮百選」。対象を各地の日常的な伝統料理等とし、歴史的、地理的、文化的価値をきちんと言語化し料理の再現写真等とともにまとめる。それらの料理が何らかのかたちで「地方伝統料理・郷土料理」として認定、オーソライズされる仕組みも必要。
- 日本食をただ発信するのではなく、その前に日本食がどのように海外で受け入れられているのか、味覚的な面も含め研究・検証すべき。
- 顕彰制度に関しては、海外で日本の文化振興に寄与した人物・組織も顕彰すべき。特に海外が日本をどのように見ているかを対象とすべきで、海外で日本の食文化を研究している人を顕彰することにより日本政府が応える仕組みをつくる必要がある。
- 食は殊に省庁横断的な面がある。例えば海外の人が日本料理を学びたいと思ってもビザの関係で学ぶことができない。文化庁には、イニシアティブをとって横断的な考え方をまとめ、関連省庁に発信する省庁であってほしい。
- フランス料理はレシピがあるのに対し、日本料理は伝承だから広がらない。また、日本人がフランスに行って厨房に入り修業し、日本に戻ってフランス料理を再現することはできるが、日本では外国の料理人を厨房に入れて修業させることができないのは問題。
- ファッション＝洋服というイメージをもつ人が多いが、ファッションには洋服だけでなく着物も入る。着物は仕立て直して着ることができるなど、洋服と比して究極のエコロジーとも言える良さがある。日本では明治期に突然洋服に変えられたが「ハレの日」には着物を着る文化が残っている。和洋折衷の衣の文化をもっている国は珍しい。
- 着物を作る職人が減っている。人間国宝が作る何百万もするような着物は残るが、そうでない西陣織等の技術者がこのままではいなくなる。
- 京都服飾文化研究財団によるジャポニズム文化展を開催した時、海外では国立の美術館で行えたが日本では断られることがあった。日本ではファッションが文化として捉え

られていない。「ファッション」という言葉が悪いのかなとも思う。

- 浜松には400年続く「浜松祭り」という大風をあげる地域密着型のお祭りがあるが、これはコミュニティの形成に資するもの。コミュニティを形成する上でお祭りは若者が入ってくるきっかけにもなる。学校のカリキュラムを柔軟化するなど、子どもたちも参加しやすくなる仕組みづくりを支援してほしい。

### 【論点3（新たな文化芸術創造都市の展開方策）関連の御意見】

- クリエイティブで才能ある人材を惹きつける政策が出遅れている。経済的インセンティブや文化的インセンティブ、すなわち質の高い生活ができるとか生活コストが安くてすむような仕組みが必要である。
- 台湾や韓国、中国は文化産業の魅力に非常に注目しているが、全て経済と結びついており、お金にならない文化は取り上げないという側面もある。日本では文化の自律性が保たれており、経済一辺倒にならないところも日本の良さ。いかにバランスを考えて世界やアジアの中でのポジションをどう考えていくかが重要な戦略になる。
- クリエイティブ産業は、小規模の事業所であることが多く、またフリーランスで仕事をしている人も多い。クリエイティブ産業振興のためには、そうした人たちのための社会保障が必要。知的財産、契約に関する教育も必要である。
- 創造都市については、市民の協働をいかに構築していくかが大切。昨年の国民文化祭では、役所は一切手を出さず、市民団体が運営から企画まで主体的に行ったことにより、実施団体に多くの経験がノウハウとして蓄積できた。浜松市では、音楽の街づくりに力を入れている。最近では都市間連携により、同じく音楽の街づくりに取り組む札幌市と音楽文化都市交流の協定を結び、演奏会を共催するなどしている。ユネスコ創造都市の音楽部門にも申請中。

### 【論点4（衣食住に関する芸術作品・資料のアーカイブ）関連の御意見】

- 残っていると思われるものでも失われているものがある。例えば京都祇園祭りでも本来行っていた行事の一部を取りやめることで続けてきている現状があり、その行事の記録は写真のみ残っているが、他は記録として失われている。
- 洋服のアーカイブも必要ではないか。その際、現物でなくとも映像でのアーカイブも考えられる。着物も然りであるが、歴史的価値のあるものばかり大事にされるが、もう少し生活文化に根差したのものにも配慮すべき。
- アメリカでは小規模な町でも服飾博物館があったりする。日本でも高級品は美術館・博物館が所蔵しているが、それに加えて生活に根差したファッションを原型保存して遺していくことも意義あると思う。
- ファッションに加えて、プロダクト・デザインのアーカイブとして遺していくことが必要ではないか（事務局より：アーカイブは一つのポイント、従前より細々とやってくれているところがあるが、それらの情報を集約、全体像を把握して意識的な保存を図っていく何らかの策を模索する必要がある旨、応答）。